



ブラジル連邦共和国

República Federativa do Brasil



山本 綾子

ブラジル人の生き方再考 —激動の8年間を終えて

「何も変わらないんじゃないかな？ ポケモン GO に夢中になって友人は多いけどね」

筆者が在籍するブラジリア連邦大学 (UnB) 観光学修士課程のクラスメイト (30代男性) は、オリンピック後のブラジルについてそう答えました。クラスでリーダー的存在の彼ですが、混乱を増す国内の政治・経済については話しても埒があかない、と半ば他人事。それよりも、もっと楽しい身近な現象に関心が向いているようです。

反政府デモや準備の遅れで世界中をヤキモキさせたリオ五輪は無事閉幕し、2013年のサッカー・コンフェデレーションズ杯から続いた国際的なスポーツ大イベントは幕を閉じました。オリンピックイヤーの今年、日本でもブラジルについての報道が特に多く、その度に今後のブラジル社会を懸念するコメントが出されました。それもそのはず、8月31日には、ジルマ大統領の弾劾が成立し、2003年に発足したルーラ政権時代から続く、労働者党 (PT) の時代はついに終わりを告げました。一昨年来、ブラジルの政治・経済・社会は歴史的にも不安定な状況にあるといえます。

筆者は、通貨リアルも景気も絶

好調の2008年から今年の7月までブラジル3都市で暮らし、思い返せば、ブラジルの絶頂期から一気に押し寄せた不況、政治の大混乱期を過ごしました。本稿では、筆者が8年間のブラジル生活を通じて気づいたブラジル人の暮らしの変化について、具体的なエピソードを交えながら、ブラジル人の国民性や今後のライフスタイル、生き方がどう変わるか、変わらないかについて考えたいと思います。

お財布の紐は再びきつく

2008年8月、リーマンショック前夜の新興国ブームに沸くブラジルでは、1ドル=15リアル台 (ちなみに、9月15日時点では1ドル=3.30リアル) という通貨高を記録しました。その頃、クリスマス前のショッピングセンターに行くと、親戚や友人に配られる大量のプレゼントを両手にぶら下げた家族で溢れていました。多くの低所得層や中間層が、20回、30回などの分割払いで車や家電などの高額製品を次々と購入するなど、消費ブーム華やかという雰囲気でした。フェリアス (長期休暇) には買い物目的のアメリカ旅行が大人気で、筆者が2008年にサンパウロ発マイアミ行きの飛行機に乗った際は、ベビーシッター同伴

のブラジル人家族を何組も見かけて目を見張りました。〈写真1〉

ところが、リーマンショック後の不景気、最近の資源安による経済危機で消費に陰りが出始めると、近所の店が次々と閉店したり、金曜の夜なのに閑散としたレストランやバーが目立つようになりました。ブラジル人のある友人家族は、クリスマスプレゼントは各自一つ用意し、家族で交換会をするという方針に変えていました。

スマホ漬けのブラジル人

買い物をやめた節約系ブラジル人が、近年急激に熱中し始めたものは、スマートフォンやタブレットではないでしょうか。おしゃべり好きのブラジル人がSNSにはまらないはずもなく、世界的にも上位のユーザー数を誇るFacebookやInstagram、日本のLINEに相当するメッセージ送受信の無料アプリWhatsAppなどに終日を費やす友人も少なくありません。大学院のクラスメイト約20人 (平均年齢約35歳) のグループが繰り返すWhatsAppメッセージは、毎日のように30件、数日放っておけば未読は数百件という具合です。今年配信サービスが始まったポケモンGOに夢中のブラジル人も多く、キャラクターが多く出現するスポッ

トをまわるツアーが企画されるなど、冒頭に挙げたとおり、国の将来そっちのけで没頭する人続出という状況です。

SNS を通じて政治に参加

スマホの普及にあわせ、社会を揺さぶるような出来事が増えたのも事実です。2013年、サッカー・コンフェデ杯の直前に始まった反政府デモはみるみる全国に広がり、ジルマ大統領（当時）の訪日キャンセルなど、日本・ブラジル交流にも影響を与えました。SNSを通じて、個人レベルのリアルな体験や情報が一瞬のうちに周知できるようになり、デモも比較的簡単に計画され、気軽に参加できるようになったためです。

2013年、当時暮らしていた赤道直下のアマゾンの都市ベレンでも、反政府デモは幾度も行われました。地元で親しまれているナザレ教会からデモはスタートすることが多く、徒歩1分のアパートに住んでいた筆者は度々見に出かけていました。文字と言葉と断片的な映像による日本の報道からは、過激派集団による非常に危険な抗議集会のような印象も受けますが、実際は、高等教育を受けたそこそこの生活をする中間層の若者が多く、フェイスペイントをして、歌ったりステップを踏みながら練り歩く様子は、メッセージを書い

たプラカードを持っていることを除いては、カーニバルそのものでした（未明までデモを続けて市庁舎に爆竹を投げ入れたり、窓ガラスを割るという破壊行為も一部では起きていますが）。



陽気なパラ州ベレンのデモ参加者（大学生などの中間層が多い）

ブラジル人の友人から WhatsApp などで送られてくる写真を見てみると、SNSを通じてインパクトある画像やフレーズで理解を共有し、友達と楽しいイベントに参加するノリで抗議デモに出向いています。彼らの多くは、普段から政治に興味を向けているわけではありません。本稿冒頭で紹介したクラスメイトも、国内の呆れるような政治の混乱には無関心を装っていましたが、実はデモに「楽しく」参加しています。参加者の多くは問題を堅苦しく考えるのではなく、今の自分の暮らしを良くしたい、自分たちの国を良くしたい、そのためにできることをする、という明るく能動的なアクションとして参加しているといえます。

政治危機が本格化した2015年以降、都市に住むブラジル人にとって、デモは最早日常の一部となった感もあります。スマホを手にしたブラジル人は、日々の思いをSNSで発散し、結果的にデモという形で政治参加するようになったと考えられます。

ちなみに、掃除夫やガードマン、お手伝いさんなど、どちらかというところと低所得、貧困層に属する複数のブラジル人にデモ行為について尋ねると、誰もがはっきりした意見は言わないものの、当時のジルマ政権を否定する態度は見せませんでした。汚職・賄賂疑惑が飛び交っても、ルーラ元大統領時代から続いたPT政権の恩恵を受けているからでしょう。

日々の暮らしに精一杯で、社会の動きに追いついていないブラジル人も少なくありません。ある30代の若いお手伝いさんに、ジルマ大統領の職務停止が決まり、テメル副大統領が大統領代行に就任した直後、その感想を尋ねたところ、「そうなんだ。毎日忙しくて、ニュースを見る時間もないのよね」と平然と言いのけます。自国の大統領を把握していないことに少し驚きましたが、未成年の子供3人を抱え、アル中の親戚の世話をし、片道2時間かけて通勤している彼女の生活を慮れば、当然の反応でこれも現実なのだと思います。

生き方の変化

このように、多人種多民族国家で貧富の差が激しいブラジルでは、ブラジル人の一般的なライフスタイルや暮らしぶりを定義づけることはできません。ただし、好



消費ブームで渋滞が状態化したサンパウロ・パウルスタ大通り（写真はいずれも筆者撮影）



ブラジリア郊外の低所得層世帯の食卓

景気時代に低所得者層を抜け出して膨らんだ中間層についていえば、一通りの家電を揃え、便利な生活を手にしたところで、生活向上の勢いはストップしたといえるかもしれません。彼らのそうした不満は、引き続き SNS などで発散され、社会にも一定の影響を与えるでしょうが、そのエネルギーは、暴力的、排他的にはならず維持されると考えます。

さて、世界の注目を浴びたりオ五輪の開閉会式セレモニーでは、ブラジルの歴史や文化が独創的かつ温かみある方法で感動的に表現

されていました。ブラジル人は難しい局面に立っても、その場その場を楽しく生き抜く知恵を持った国民であることはよく指摘されます。今回のような異常な政治・社会状況に直面しても、アフリカや中東、一部のアジアのようなより混沌とした事態に至らないのは、そうした国民性故なのかもしれません。

こうして考えると、「ブラジルはどう変わるか?」という問いに対して、冒頭のクラスメイトが言った「変わらない」という答えには妙に納得がいきます。ブラジル人のライフスタイルや暮らしぶり

は少しずつ変化を遂げ、スマホ依存など気になる点がありますが、本来の明るく逞しく何事にも柔軟に対処するブラジル人らしい生き方は、今後も変わらないのではないのでしょうか。日本人に最も足りないと思われるこの特性を持ち続け、今後も予測不能(!)で魅力的なブラジルでいて欲しいと願います。

(やまもと あやこ『ブラジル・カルチャー図鑑』著者、2008年～16年7月在ブラジル)

ラテンアメリカ参考図書案内



『ラテンアメリカ 1968年論』

小倉 英敬 新泉社

2015年11月 414頁 3,200円+税 ISBN-978-4-7877-1509-8

1968年は、世界的に様々な歴史に記憶される現象が起きた年である。米国のベトナム戦争反対、チェコの「プラハの春」、フランスの五月革命、中国の文化大革命、日本での全共闘等学生運動の過激化などのほか、特にラテンアメリカにおいては、キューバ革命の影響、「進歩のための同盟」、従属論、解放の神学などがあって、メキシコでは学生運動を弾圧したトラテロコの夜」事件、ペルーではベラスコ左翼軍事クーデタ、キューバでも反革命を詩人・文学者「バディージャ」批判が行われ、チリでは農地改革による農場接収と政党間の対立激化が70年のアジェンデ政権成立に繋がり、パナマでは運河をめぐるナショナリズム、反米感情の高まりがトリホス中佐のクーデタによる政権奪取とパナマ運河返還交渉の進展に進んだ。ブラジルでは64年に発足した軍事政権に対する都市ゲリラの武力闘争が激化し、アルゼンチンでもファン・ペロンが国外に亡命している間の66年の軍事クーデタで発足したオンガニア政権への蒙特ネロス等の都市ゲリラ闘争が活発化、ウルグアイも同様にトゥバマロスが武闘を繰り広げた。

これら「1968年現象」は、資本主義国においては先進国・開発途上国を問わず中間層の若者が主体になった叛乱だったと見れば、その後の経済成長で増大した新中間下層が雇用が不安定化した場合に特に労働者層や貧困層が社会変革を求める重要な主体的要素になる。この十数年「中間層」を経済成長の基盤と位置付けて、その拡大と社会的定着を政策目標に掲げる政権が世界各地で登場してきた所以であるとする、横断的な歴史考察に基づく示唆に富んだ労作である。

(桜井 敏浩)